

国語 問題②／3	キャリア教養学科 食物栄養専攻 福祉こども専攻	受験番号	番 氏名
-------------	-------------------------------	------	---------

五、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

京都は観光都市といわれるが、それ以上に、精密機械、測定機器などの先端技術から日々の用具や伝統の工芸品をつくる手工業まで、いわゆる内陸型の工業都市である。京都で生まれ育ったわたしは、身近なところにそうした工場や工房がひしめくようにあったので、逆にこれまであらためて「ものづくり」について考えることはなかった。

「ものづくり」といえば手仕事、手仕事といえば熟練、熟練といえば「匠」の腕……。そのような「わざ」（技と術）を繋ぎ糸としたイメージの連鎖がある。そして「匠」がつくる物については、くり返しに耐え長持ちする（堅牢）、使いやすい（簡便）、無駄がない（正確）などといった特性がまずは問われる。「用」にかなう「形」がぎりぎりまで突きつめられているか、というふうに。

しかし、こうした手仕事がじつは「合作」、つまり「協働」であるという視点から、あらためて「ものづくり」について考えてみたいという気持ちだが、このところのっている。

「ものづくり」といえば、「匠」の一徹、つまり「わざ」の突きつめといった製作者の心持ちについて話が行きがちであるが、「ものづくり」はなにより「合作」である。たとえば、江弘毅の『有次と庖丁』（新潮社）が描いているのはものづくりのそういう横つながりであって、庖丁づくりは料理人の依頼に応えて取りかかると。京都の庖丁屋「有次」は仕入れを堺の打刃物の産地問屋に依頼する。この製造卸の仕事は、鉄を鍛造する鍛冶屋、そこで鍛造した半製品を研ぎ、磨く刃付け屋、それに柄を取り付ける柄屋、この三つの職をアレンジして庖丁をつくり、出荷する。そこにあるのは、下請け、孫請けではない。横請け。という協力関係である。ちなみに、堺のそうした職人たちのネットワークは、鉄砲づくりにおける鉄の銃身、引き金や火蓋のからくり、木製の銃身に施される象眼や彫金などの装飾などの「合作」の伝統を引きつぐものであるという。

このような「合作」を統べる産地問屋、さらにそれを頼む庖丁屋が応えようとしているのは、いうまでもなく庖丁を使う料理人である。つまり「ものづくり」の「もの」とは大半が道具、つまり使われる物であり、だから当然、使う者への思いが根底にある。ここには、使う人が使いやすいようにという思いやりとともに、その人がはたしてどう使い込むか、どう使いこなすか見ものだといった挑発的な思いもきつとあるはずだ。

もう一つ、「横請け」する個々の職人には、それぞれ同業者への思いも強くある。道具をつくるにあたってどれほどその作業を突きつめているかという思い、つまりはおなじ仕事をするにつけ、「いいかげん」「おぎなり」と見られるのはどうしても我慢ならないとの思いである。この同業者は同時代のそれだけでなく、未来のそれでもある。数十年後の職人たちに見られても恥ずかしくないものをつくっておきたいという職人の矜持がここにはある。

石垣をつくる広島のある石工がこう語っていたと、宮本常一は報告している。「あとから来たものが他の家の田の石垣をつくるとき、やっぱり粗末なことはできないものである。まえに仕事にきたものがザツな仕事をしておくと、こちらもついでツな仕事をする。……結局いい仕事をしておけば、それは自分ばかりでなく、あとから来るものもその気持ちをうけついでくれるものだ」（『庶民の発見』講談社学術文庫）。

宮本は、石工のこの言葉に、だれに褒められなくとも命じられなくとも「自らが自らに命令することのできる尊さ」を見つけた。「A」とは、約めればそういうことなのだろう。

国語 問題 ③ / 3	キャリア教養学科 食物栄養専攻 福祉こども専攻	受験番号	番 氏名
----------------	-------------------------------	------	---------

「ものづくり」に銘はない。民藝運動を興した柳宗悦やなぎむねよしを引けば、「工藝は無銘に生きる」（『民藝四十年』岩波文庫）。ここでは作り手も無名であれば、宛先も無名である。が、無名であるからこそ、その心持ち、その矜持は厳格になる。使用者との「協働」である。使用者と工人とがある仕事に向けてしのぎを削る。そこにあるのは、損得を超えた仕事の突きつめである。使う者と作る者、そして作る者どうしの無言の「信頼」である。売れ行きとか付加価値ばかり斟酌しんしゃくする販売／消費の市場の論理ではなく、「協働」の厳しさと歎びである。

シェアという言葉がある。シェアといえばかつては市場での占有率を言ったが、いまはその意味が逆転している。ワークシェアリングやシェアハウスという言葉にあるように、それは今日では、占有ではなく分有・共有を意味する。「ものづくり」における「匠」の内的な矜持は、相互の絆として編まれることなくして保てない。ここに「匠」ではないわたしたち一人ひとりが育むべき社会性について学ぶべきものがある。

（鷺田清一 著 『生きながらえる術』すべ講談社 2019年所収）

問一 傍線部ア「繫」イ「研」ウ「興」の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「『用』にかなう『形』がぎりぎりまで突きつめられている」という「ものづくり」に対する製作者の心持ちについて、端的に表現した言葉を、本文中より六字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部②「使う者への思い」とは、具体的にはどのようなものか、本文中の言葉を用いて、二点答えなさい。

問四 傍線部③「それ」を具体的に説明している一文を本文中より抜き出し、始めと終わりの六字を答えなさい。

問五 空欄Aに入る言葉を、本文中より五字で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部④「しのぎを削る」の意味としてふさわしいものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 互いに高め合うこと      イ 激しく争うこと      ウ 互いに苦境を耐え忍ぶこと

問七 傍線部⑤「ここに『匠』ではないわたしたち一人ひとりが育むべき社会性について学ぶべきものがある。」という作者の考えに対して、あなたが考えることを五百字以内で述べなさい。

※句読点やカッコ等の符号も一字と数える